

わたくしの足跡
マグレブ

津田あけみ



わたくしの足跡
マグレブ

津田あけみ

はしがき

何年も前からマグレブを訪ねたいと思い続けていたが、やっと望みがかなった。その感激と記憶を、そのまま放散してしまうのは余りにも惜しいと思う一念が、本書作成の動機となった。旅行に出かける時には、事前に勉強し、そのノートを持って行く私であるが、原稿を書き始めてみると、いかにも手元の文献、資料が不十分であることを痛感した。折角書き始めたのだから、という気持で最後まで書き終えたが、次の機会にマグレブを訪れる時の、私自身のテキストになればと思っている。読んでいただいた方々から、もっともっと多くのご教示を受けたいという思いをこめて、本書を完成した。途中で約三週間、エジプトへの旅のために執筆を中断した。この書に続いてエジプトについても書きたいと考えている。

この書の編成はチュニジア、アルジェリア、モロッコの私の歩いた順になっている。マグレブ三国の歴史は古いが、ローマ、ゲルマン、アラブ・イスラムなどの長い征服のもとにあり、三国自体の一貫した歴史を記述することは不可能であるといえる。それぞ

れの国についての記述の冒頭に、それぞれの国の歴史を述べたが、日本では十分な情報に乏しいことを、告白しておかなければならない。特に、歴史上の事件の年代、場所、当事者などについて、専門書の記述がバラバラなのは驚いた。そのために、本書では最もふさわしいとおもえる記述を取り上げたが、両論併記したり、説明した上で一説を採用したりした。

歴史の説明をした上で、私が訪ねた遺跡への旅の記述に移る。マグレブ三国の遺跡は、未発掘のものが多く、またカルタゴおよびその周辺のように、異なる文化が次々に積み重ねられたところでは、発掘も容易でないし、手の着けようもないというのが、現実のようである。

マグレブ三国の遺跡の中では、チュニスのバルドー博物館の、フェニキヤ人の遺品とローマ時代のモザイクについて特に述べておきたい。イタリアのナポリ国立博物館のモザイクは、たしかに素晴らしいものを揃えているとおもうが、バルドー国立博物館こそが、その数や大きさからいって世界一と思える。私はこれらのモザイクの迫力に圧倒された。

アルジェリアでは、カスバの現状を記したが、スラム化したカスバは、政府の都市美化政策によってとり壊しの計画が、進められているという。またアルジェリアでは、私がぜひ訪ねたいと思い、見ることでできなかった遺跡について、調べた限りのことを書いた。次の機会には、本書を持ってこれらの遺跡を訪ねたいと思っている。

モロッコでは、私としては初めての、ディーブ・マグレブに飛びこんだ、砂漠となつめ椰子の中で呼吸した四日間の旅、そこでのベルベル族の生活は、私に強烈な印象を与えた。

私が書いた、初めての本である。

昭和五四年五月

津田あけみ

はしがき

チュニジア

I チュニジア

1 チュニスの街 3

2 バビープ・ブルギバ通り チュニスの第一夜

チュニジア 5

古く栄えた歴史 カルタゴ

II カルタゴの盛衰

1 カルタゴと第一次ポエニ戦争 8

カルタゴの隆盛 ミラツォ沖の海戦 カルタゴ防衛の成功
アエグサ島沖の海戦 ウティカの反乱

2 ハンニバルと第二次ポエニ戦争 12

ハンニバル・バルカス 第二次ポエニ戦争の開戦 カンネーの
戦い 挽回したローマ軍 ザマの戦い ハンニバルの最期

3 第三次ポエニ戦争 19

スミディアの挑発 侵略者としてのローマ カルタゴの滅亡
ローマ人によるカルタゴ再建 23

4 ローマの植民 アウグストスの再建

5 ゲルマン部族とカルタゴ 25

ヴァンダル王国の首都 アウグステイヌス その後のカルタゴ

III 遺跡をたずねて

1 カルタゴの遺跡 28

カルタゴの生贄 トフェットの生贄の祭壇 軍港と商港 コロ
シアム 聖ルイ教会 ビュルサの丘 劇場 ビザンチンの地下
教会 コンコルディア神殿上のビザンチン教会 ローマ時代の
学校跡 アントニオの大浴場

2 シデイ・ブ・サイド 44

ファティマの手

3 スーク 45

ミナレット スークにて

4 水道橋をみる 47

ウティカ 48

ローマの穀倉地帯 砂の下の町 運河 フェニキヤ人の墓地

ローマ時代

6 バルドー国立博物館 58

武将の屋敷跡 踊る小人 オベリスク型奉納石碑 ドウガの墓
碑 土製マスク モザイク マストに縛られるオデッセウス

田園の生活 デイオニソスの行列 ヴェルギリウスと二人のミ
ューズ フェニキヤの母子像 チュニスからアルジェへ

アルジェリア

69

I アルジェリア

71

1 アルジェリアの歴史 71

古く栄えた歴史 スミディア王国の建国 マツシニッサ ユバ
一世 ユバ二世 プトレマイオス一世 カリグラ帝の暗殺

2 変転の歴史 75

アントニウス・ピウス帝 イスラムの支配 オスマン・トルコ
フランス領 アルジェリアの独立

II 遺跡をたずねて

80

1 アルジェ 80

早朝のアザーン アルジェの眺望 絶望の植物園行き バルド
ー博物館

2 カスバ 86

アルジェのカスバ 建物に入って カスバの通りで サウナ風
呂 混合モスク 美しい夜

III コンスタンティーン

94

1 コンスタンティーンへ 94

岩の上の町 紀元四世紀のコンスタンティヌス一世 コンスタ
ンティーンの町 シディ・ム・シンドの吊橋 ギュスタープ・マ
ルセル博物館 メドラセンの墓 コンスタンティーンのカスバ
ハイクのおしゃれ マツシニッサの墓所 訪ねたかったティム
ガード 後髪をひかれながら

IV トンボー・ド・ラ・クレティエンヌとティパサ

108

1 キリスト教徒の墓 108

2 ティパサ 112

ティパサ 競技場 東西大通り 水飲み場 劇場 教会 浴場
南北大通り モザイクの部屋の家 ホテルにて

モロッコ

121

I モロッコ

123

カサブランカ空港 王国モロッコ

1 歴史からみたモロッコ 124

ベルベル朝とローマ時代 マウレタニア王国

2 ヴァンダル族と東ローマ帝国の支配 126

ヴァンダル族の南下 ヴァンダル王国の建設 ヴァンダル王国
の繁栄 東ローマ帝国の進出 ユステニアヌス帝の北アフリ

カ進出	
3 イスラム化の展開	130
マホメットの登場 マホメットの子供たち マホメット以後 ウクバ・イブン・ナフィの北アフリカ征服 ウマイヤ王朝 モ ロッコのイドリス王朝	
4 ベルベル王朝とその後	136
ベルベル王朝の支配 トンブクトウの攻略 アラウイット朝 モロッコの独立	
II モロッコの遺跡をたずねて	140
1 カサブランカ	140
カサブランカ 中央市場 アンファ海岸	
2 ラバト	143
ラバト 王宮と王家のモスク モハメッド五世の廟とハッサン の塔 ハッサン・モスク ハッサンの塔 モハメッド五世の廟 セラ ウダイヤ・カスバ メディナ ラバト・ヒルトン・ホテ ル	
3 メクネス付近	154
ラバトからメクネスへ メクネス ムーライ・イスマイルの倉 庫 ムーライ・イスマイル・モスク バブ・エル・マンスール の門 ボルビリスの遺跡 ムーレイ・イドリス市	

4 フェズ	162
メクネスからフェズへ フェズ エル・バリ ブー・アイナニ ア・メデルサ ムーレイ・イドリス二世のモスク カラウイ ン・モスク アル・アッタリン・モスク バレ・ジャメ・ホテ ルへ	
5 フェズからクサール・エ・スークのオアシスへ	173
フェズからイフランへ アトラス越え ジッズ川 ベルベルの 姉弟 クサール・エ・スーク	
6 砂漠の旅	181
砂漠への出立 アマダン村 デュールの日曜市場 エル・フリー ド サハラ砂漠 砂漠の化石 メルズウガの砂丘 デュールの 町のクサールの内部	
7 ウアルザザトへ	197
もう一つの砂漠の町、ウアルザザトへ トドウラ溪谷 イグヒ ール村 チネルヒール ドロマデール キャラバン ウアルザ ザトの日の出	
8 ふたたびアトラスを越える	209
コル・デュ・ティツカ峠 ベルベルとマラケシュ マラケシュ クトビアの塔 サード朝の墓所 バヒヤ宮殿 ジャマール・エ ル・フナー広場 ベルベルの踊り ガイドのミームン氏 マラ ケシュからアガデイルへ	

9 旅の終り 223

雨のカサブランカ 機内の人々

参考文献 227

あとがき 229

著者略歴 233

あとがき

マグレブの旅の日記、ノート、メモが私にとって初めての、まとまったものになった。近年、手紙より長文のものを書いたことのない私は、思いつくままに、書きに書きまくってしまった。書きたくて、先に進みたくて、何ヵ月間というもの、ただの一日も筆を休んだ日はなかった。ある時は支離滅裂になり、自分が分裂症ではないかと悩み、またある時は、私には思想がないと突然に悩みはじめ、格調低く、独断と偏見に満ちあふれた文章に、嫌気がさした。しかし、マグレブの旅の感激が、とうとう筆を休ませなかった。

この書の装丁には私の思いがこめてある。砂漠の砂と緑のオアシスの組合わせだ。サハラ砂漠の砂の色は、もっと赤錆色なのだが、そのようにするとオアシスの緑が弱くなってしまいうので、ずっと薄い色に変えた。

本書の素材になったのは、日本交通公社と日本通運の業務提携による『ルックヘユニーク』マグレブ三国とサハラ砂漠の旅』（昭和五三年一月一六日—二月一日）のた

めに事前に作成したノートおよび旅行中に書き留めたメモである。日程について、快く計画を変更して下さった日通航空国際旅行部の大浦さん、菅さんの御好意は忘れられない。本書に収録した写真は、一枚を除いて、この旅の中で撮影したものである。

旅行の時はいつも決まってお世話になる、日通航空添乗員課の永谷幸人さんは、あれも見たい、これも見たいと、満足することを知らない私に、どんな時でも、どんな所でも、精一杯の努力をして下さる。今回の旅も、私一人で出かけられたのは、家族全員の永谷さんに対する信頼感からである。永谷さんが添乗するならと、一人旅を許してもらえた。感謝の気持はつきない。

日本交通公社、秘書室、比企紀和さんは、私の旅の、文句の聞き役である。いつも笑顔でたたえて熱心に聞いてくれる。その忍耐力は非常なものだと思う。本社内支店の宇留野さん、石出さんには、いつもわがまま勝手な別行動の手配をお願いしては、ご面倒をおかけしている。お詫びしておきたい。

彪衛、隼雄、良知の弟たち、都子さん、スミ子さんたち、いつも留守中、なにかとお心遣いをいただいて感謝している。また生駒はるえさんには、旅行中、夫の世話を全部まかせきり。安心して旅を続けられるのははるえさんのおかげである。

夫は「楽しんでいらっしゃい」と、いつも喜んで旅行に出してくれる。旅行が決まる

と、参考にするあの本、この本の買い出しや、資料の探索の係は彼である。この旅を、形にしようといういい出したのも夫である。

今回の旅は、母と別に、一人で参加した旅であった。病い知らずだった母が、膝を痛めて一緒にできなかったのは残念であった。いつかこの本を片手に、母と一緒に同じ道を、再びたどりたいと思っている。

父は、母と私の二人を、旅行に出すのがうれしいという。父にとつての生き甲斐、それは私たち家族の喜ぶ姿を見ることがという。旅が終わるといつも、「今度はどこに行くのだい」と聞いてくれる。旅の終わりは、次の旅の始まりになる。その父に、私の旅の話聞いてもらいたい。父のよるこびが私の感激であることを知ってほしい。

この書を竹内昇、わたくしの父に――。

一九六二年七月～一九六四年七月。アメリカ・イリノイ州に夫と共に滞在。一九六三年一月二日（アメリカ日時）のケネディ大統領暗殺事件は、記憶に新しい。帰途、ヨーロッパ八カ国を一カ月半かけて旅行。ドイツでの東西ベルリンの壁と、そこにつくられた死者への墓碑と花輪の数々は、忘れ難い。

一九七一年一〇月。母とヨーロッパへ。アイスキュロスの「アガメムノン」とシュリーマンと「獅子門」のミケーネ。アクロポリスの丘の上にそびえるバルテノン神殿。

一九七三年一〇月。母と西欧、東欧へ。スペインのセゴビアのローマの水道橋と、ブタベストのローマの遺跡を見て、ローマ帝国の領土の広大さに驚く。ミラノで、最後の晩餐を見る。

一九七四年五月。母と中欧、南欧へ。シヨバンとシヨルジュ・サンドの「雨だれ」で知られるバルデモーサの修道院のあまりのきれいさがかえって哀しかった。帰途弟とシカゴで合流。アメリカ、カナダへ。

一九七五年三月。母とエジプト、中近東へ。イスファーフアン、ペルセポリス、ナクシ・イルスラム、バビロン、バール・ベック、犬の川の岩碑、ビブロス、バグダード博物館と実り多い旅行。

一九七六年四月。父、母と三人でシルクロードへ。アレギザンダー、チンギス・ハーンにふれ、ブハラ、サマルカンドと中央アジアからバミヤンまでの、失われた仏教文化と点在するイスラム文化をみる。

一九七六年六月。夫、弟とアメリカへ。インディアン・リザベーションの不毛の土地と、貧しい

インディアン生活の生活をみる。

一九七六年十一月。母と友人達とヨーロッパへ。三度目にやっと訪れることのできたナポリ国立博物館のアレギザンダー大王とダレイオス三世のモザイクに感動する。

一九七七年十一月。母と南米、中米へ。クスコ、マチュ・ピチュとインカの遺跡を歩き、母と二人、夢中で歩いたユカタン半島のマヤの遺跡、チチュン・イツツァ。

一九七八年十一月。マグレブ三國へ。本書の素材となった。

一九七九年四月。弟とエジプトおよび東南アジアへ。古王国からプトレマイオス王朝末期まで、エジプトの歴史の流れを見きわめた旅だった。

田園調布雙葉学園 学習院女子短期大学卒業
家族 夫 津田眞澄 一橋大学社会学部教授
現住所 東京都大田区久が原四一八―二〇

わたくしの足跡 マグレブ

発行日 昭和五四年八月一〇日

著者 津田あけみ

東京都大田区久が原四一八二〇

製作 中央公論事業出版

東京都千代田区丸の内丸ビル5F

印刷 松濤印刷

製本 藤巧社

限定三〇〇部 *非売品